

白すみれとしいの木

小川未明

青空文庫

一

北の方のある村に、仲のよくない兄弟がありました。父親の死んだ後は兄は弟をば、むごたらしいでに、いじめました。

弟は、どちらかといえ巴、気のきかない、おんぼりとした質で、学校へ行つても、あまり物事をよく覚えませんでした。だから、兄は弟をば、つねにばか者扱いにしていたのであります。

弟は気がやさしくて、けつして兄に對して手向かいなどをしたことがありません。いつも兄にいじめられて、しくしく泣いていました。

冬の、ある寒い寒い晩のこと、格別弟が悪いことをしたのではないのに、兄は弟をいじめました。

「おまえみたいなばかは、こんな寒い晩に外に立つてはいるがいい。そして、凍え死んだつて、俺はおまえをかわいそとは思わないぞ。」と、兄はののしりました。

弟は、どうかそんなことはいわずに、家の中に置いてくれないと頼みますのを、兄は無理

に弟を戸の外に出して、かぎをかけてしました。

家の外は、野にも山にも雪が積もつてました。その晩は、めつたにない寒さであつて、空は青ガラスを張つたようにされて、星晴れがしていました。また、皎々とした月が下げ界を照らしていました。

弟は、雪の上に茫然としていますと、目から流れ出る涙までが凍つてしまふほどであります。弟は、こんな不運なくらいなら、いつそ河にでも入つて死んでしまつたほういいと思ひました。

いつのまにか、寒さのために雪の上は堅く凍つてきました。それは鋼鉄のように、飛び上がつてもカンカンと響くばかりで、埋まることはありませんでした。

弟は雪の上を渡つて、河のある方へいきました。すると、河の水もまた鋼鉄のように凍つていたのであります。

身を投げて死のうにも、水がないし、どうしたらいいだろうと思つて、途方に暮れていますと、はるかかなたに、きばのようにとがつた高い山が、月に照らされて見えるのでありました。

昔から、あの山の下には、鬼が住んでいるといわれていました。

二

弟は、どうせ死ぬなら、いつそ鬼おににでも食くわれて死んでしまつたほうがいいと思おもいました。それにしても、何十里あるかわかりませんでした。

月光げつこうに照らされている、その遠い山影やまかげを望のぞみますと、もし雪ゆきを渡わたつてまつすぐにいくことができたならそんなに遠くもないだろう。駆かけて、駆かけていつたら、今夜こんやのうちにも

いかれないと思おもわれました。

弟は、そう思おもうと、雪ゆきの上うえをひた走りはしに走りはしはじめたのです。河かわも野のもどこも平坦へいたんな白い畠はたみを敷き詰めたようでありましたから、どんな近道ちかみちもできるのでありました。

彼は、駆かけて、駆かけて、駆かけぬきました。そして疲つかれると、体からだから汗あせが出て、これほど寒ささむもそんなに寒いとは思おもいませんでした。彼は、ところどころ休みました。そして行く手にそびえて見える高い山たかやまを仰あおぎました。月の光つきひかりが、かすかにその山やまを浮うき出だしているのでした。

弟は、ほとんど自分じぶんでも、どうしてこうよく走れるかわからぬほど走りました。そし

て、どこをどう走つてきたかわかりませんでした。夜明けごろであります。赤い火の球が自分の前になつて、雪の上をころころと転げていきました。

彼は、これはなんだろうと思いました。きっと魔物にちがいない。けれどもう自分の命を惜しいと思いませんから、それをつかまえようといつしょうけんめいに跡を追いました。すると火の球は、ころころと谷底に転がり落ちました。

彼も、火の球について谷へ下りようとしますと、もはや夜が明けていました。そして、そこは路もないまったく山中で、あのきばのように高い山は、まだ遠くなつて見えたのであります。

どうしたらいいかと思つて、まごまごしていますと、その中に日の光がさしてきました。雪はしだいに軟らかくなつて、弟は、もう一步も身動きすることができなくなりました。ちょうどそこへ、薪を負つたおじいさんが通りかかりました。そして弟を見つけて、こんなところに少年がいたのでびっくりいたしました。

おじいさんは、この山中にただ一人住んでいる不思議な人間であります。弟は、

おじいさんの小屋に連れられてまいりました。

「こんな山中だけれど、なに不自由はない。長くここに住めば、春、夏、秋、冬、いろいろの美しいながめもあれば、楽しみもある。おまえはいいと思つたら、いつまでも住むがいい。」と、おじいさんはいいました。ふもとには、温泉もわいていたのであります。そのうち雪が消えて春になりました。弟は、故郷が恋しくなりました。いまごろ兄さんはどうしていなさるだろうかと思いました。そのことをおじいさんにいいました。するとおじいさんは、木の実と草の種子を弟に与えました。

「この草の種子は、白すみれだ。おまえが、この種子をまきながらいけば、またここへ帰つてくるような時分に白い花が咲いているので路がわかる。この木の実は、おまえが腹が減つたときに食べるしいの実だ。」といいました。

弟は、最初、この山へくるときには、雪の上を渡つて一夜にきましたけれど、雪が消えてからは、森や、林や、河があつて、五日も六日も歩かなければ、自分の生まれた村に帰ることができませんでした。彼は、木の実と草の種子をもらつて、出発したのであります。そしてある日の暮れ方、彼は、ようやく懐かしい我が家へ帰つたのであります。

「兄さん、ただいま帰りました。」と、弟はいつて、敷居をまたぐと、なにかしていた兄は、びっくりして振り向いて、

「おまえは、まだ死なかつたのか。もうおまえみたいなばかには用事がないから、さつき出ていけ。」といつて、弟は、取りつく島がなかつたのです。

「自分の真心がいつか、兄さんにわかるときがあろう。」と、弟は、一粒のしいの実を裏庭に埋めて、どこへとなく立ち去りました。

兄は、その後白すみれの花を見て、いじらしい花だと思いました。そして、弟の姿を思い出しました。また、しいの木に風の当たるのを聞いて、悲しいと思い、弟をいじめたことを後悔したそうです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「読売新聞」

1920（大正9）年1月9～10日、12日

※表題は底本では、「白《しら》すみれとしの木《ホシノキ》」となりますが。

※初出時の表題は「白董と椎木」です。

入力：ふるばの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://wwwaozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白すみれとしいの木

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>